研究発表要旨

A Word Child における Hilary の道徳観について

石　本　弘　子

この作品を読めば読者は主人公 Hilary の道徳観について考えさせられる。恵まれない育ちであったとは言え、Hilary の行動や言動には常識では理解できない点が数多くある。

彼は少年時代には悪名高い不良で、自暴自棄になっていた時に教師 Osmand と出会う。先生のおかげで Hilary の言語の才能が開花し、ついに Oxford に進学するに至る。Oxford で学友 Gunnar の妻 Anne に恋して、想いが受け入れられ密会をするようになる。やがて Anne が別れ話を持ち出した際に、妊娠しているお腹の赤ちゃんが夫 Gunnar の子供であることを知る。逆上した Hilary は Anne を乗せた車で暴走し、交通事故を起こし、自分は助かるが、Anne は亡くなってしまう。Hilary は Gunnar に謝罪もせず、Gunnar の存在を打ち消して、過去はもはや存在しないと述べている。

Hilary の妹 Crystal について考察したい。Crystal は Anne が亡くなった夜、Gunnar を慰めるために彼にバージンを捧げていたが、時が来るまで誰にも打ち明けずに秘めておく強さを持っていた。Crystal は傷ついた人の心を癒す奇跡的な力を持っている。道徳的に見本となる人物だ。次に Arthur について述べたいと思う。Anne が亡くなった事件の数年後に Hilary の職場の所長として Gunnar が赴任することになる。Hilary はパニックに陥り、もう自分独りでは抱え込めずに Crystal の婚約者 Arthur に打ち明けることにする。Arthur は追い詰められた Hilary の最良の聞き手であると同時に Murdoch の代弁者の役割を果たしている。

さらに、Hilary の罪は許されるのかを考えてみたい。Murdoch は「自分が悪くないと思っていない人はあまりにも特別な境遇にあるので、自分が他人に可能な限り大きな害をもたらすことをやめることができない」と述べている。Hilary は正にこの立場であり、Anne の死や Gunnar の苦しみに対して罪は感じているが、自己憐憫をかきたて自己正当化している。許すことは神の力がないと不可能であるので、神を信じていない Hilary は許されない。そして、Hilary のために神の不在は彼の罪を背負う身代わりになった。これは宗教的な信念を捻じ曲げていて、道理に反している。Hilary が宗教観を持てなかったことについて考えてみたい。「宗教を会得するための唯一の方法は小さい子供の時に教えられることだ。それを呼吸するみたいに吸い込まなければいけない」と Murdoch は条件を示している。Hilary には宗教やクリスチャン魂を会得する機会もなく、生まれついての宗教的な魂も持ち合わせていなかったので、必要性を感じていたとしても、神を信じることができずに罪を許されなかった。

最後に Murdoch がなぜ Hilary のような人物を主人公として描いたかを述べたいと思う。この小説は、Hilary が劣等感を克服するのに役立ったかもしれない温和で愛情に満ちた保障を提供していた宗教的な信仰が20世紀に低下したことを知らせている。Hilary は宗教心を持ち合わせてなかったが、人々の宗教心が希薄になってきていることを Murdoch は指摘している。さらに、この小説の中心にある衝突は Hilary と Gunnar の階級差である。優位な立場から下の者に慈悲を与えるような気持ちが Gunnar にあったことを Hilary が本能的に感じ取っている。また、Murdoch の Hilary に対する感情は Big Ben の moon face を用いて表されている。moon face は Hilary の内なる怒りと力とそれをかきたてる特権が霧を通して描かれている。Murdoch は彼の喪失や本質、identity、愛への願望を理解するように読者に求めている。Murdoch は Hilary にさえも人間性を認めて温かく見守り、読者にもそうして欲しいと願ったのだ。また、Hilary が平凡な不良ではなく、言語の

習得に優れた才能を持っていたWord　Childであったからこそ Murdoch は魅力を感じたのだ。Hilary は階級社会によって不利な立場であったにもかかわらず努力をして一時的には憧れていた身分になる。だが、自分の根本にある暴力的な感情を抑えることができずに失敗する。道徳観の欠乏によって身を破滅させたのだ。Murdoch はこのような人物を描くことで単に社会批判をしたのではなく、彼に魅力があることを訴えている。心理的な面において熟考されて書かれている作品である。